和歌山大学教育学部附属小学校

らいぶ 創 つくりえいたー
LIVE CREATOR

NO.74
2015年3月
研究広報誌

2014年度を振り返って

CONTENTS

●2014 年度を振り返って……1
●今年度の研究を振り返って「学びをデザインする子どもたち」……2
●ＩＣＴ活用授業研究会を終えて……3
●学習紹介（体育科）：ＩＣＴを活用した跳び箱運動……4
●学習紹介（国語科）：複式学級１年目　教師と子ども　いろいろ挑戦……5
●学習紹介（算数科）：教師自身が実験をする楽しみを…… 6
●学習紹介（理科科）：子どもとともに歩んだ１年…… 7
●学習紹介（国語科）：「…語りによる表現活動の取り組み……8

来年度へつなぐ

和歌山大学教育学部附属小学校　副校長 池田　彦男



平成２６年度も締めくくりの時期を迎えました。「学びをデザインする子どもたち」というテーマで研究に取り組み，３年という一区切りになります。

「学びをデザインする子どもたち」とテーマを設定することで，単元を構成するにあたり，これまで教師が子どもの学びをデザインしてきたことから，子ども自らが学びをデザインすることが，子どもの主体的な学びを実現するためには必要であると考えました。そのために，サブテーマを設定し研究の視点を明確にしながら進めてまいりました。

３年次である今年度は，「課題意識の深化を通して」としました。子どもたちの興味関心から生まれる「学びたい」という欲求が，学習課題に向かっていったり，新たな疑問を生み出していったりする過程を何よりも大切にしたいと考えたからです。また，３年間を通して，学級に温かい雰囲気が流れ，どの子にとっても居心地のよい，聴き合い・学び合える学級風土を大切にしてきました。

研究の成果を，研究発表会や紀要等で発信してまいりました。研究を進めるにあたり，多くの先生方にご指導，ご助言いただくことができましたこと，心より御礼申し上げます。

来年度に向けて，現在，本年度の研究の検証を行いながら方向性を検討しているところです。今までの取組の成果を継承しながらも，発展させていく必要があります。新年度早々には，報告できるかと思います。

島崎藤村は「人の世に三智あり。自ら学んで得る智，人と関わりあって得る智，体験することから得る智がそれである。」と述べています。子どもの学びをしっかり見据えながら，「三智に富む」学校づくり，授業づくりができればと思います。

今後とも，附属小学校教育へのより一層のご理解ご支援をお願いいたします。

副校長　　池田　彦男

今年度の研究を振り返って　Action 2

学びをデザインする子どもたち
～課題意識の深化を通して～

研究主任
梶本久子



【学びをデザインする子どもたち】

本校は「学びをデザインする子どもたち～課題意識の深化を通して～」という研究テーマを掲げて，研究を進めてまいりました。学びをつくりだすのは何より学習主体である子どもたち自身であり，そのような学びを自主的にデザインしていくことができる子どもたちを育てていきたいと考えました。

今年度の研究を振り返り，校内研究授業（以下，校内研），夏季教科領域別研修会，研究発表会の成果と課題について報告します。

校内研として，５月以降６月下旬までに 22 本の授業を行い，うち 10 本を各教科・領域部の提案授業としました。授業後の協議会において互いの「学び」を確かめ合いながら，自己の研究に活かしていくため『学びの足跡』という形で記録してきました。校内研修会では，本校職員はもとより，和歌山県・和歌山市教育委員会の先生方，和歌山大学の先生方，研究協力校の先生方からご意見をいただき，研究を深めることができました。また，教師全員がより研究テーマを共通理解できるように，今年度は，従来の校内研に加え，外部講師の先生を招いての講演やパネルディスカッション，研究推進のポイントを具体的な姿で示した研修会，授業の相互参観等，多くの研修で授業を観る「視点」の共有をしました。

７月の夏季教科領域別研修会では，それぞれの教科・領域で工夫を凝らした内容で研修会を開催したところ，例年通り，たくさんの先生方にご参会いただき，本校の取り組みに対する貴重なご意見をいただきました。和歌山市の研究会と共催する教科もあり，ともに研究を深める機会にもなりました。

これまでの研究授業や研修会で得たことをさらに活かし，11 月２日に教育研究発表会を開催できたことにお礼申し上げます。研究発表会では特に，

子どもたちの課題意識の深化がどのような場面で，どのようになされていたのかを通して，
子どもたちがどのように学びをデザインしていたのか

という視点で参観いただき，ご意見を伺いました。

今年度は，数年間，本校の研究に携わってくださった秋田喜代美先生と佐藤学先生の対談だけでなく，協議会の助言もしていただき，多くのことを学ぶことができました。

先生方からは，研究の成果として①子どもたちが聴き合い学び合う関係として育ってきてい姿がみられたこと，②環境作りや場の工夫が子どもたちの課題意識を深化する手立てにつながっていることの２点を挙げていただきました。

課題として，以下３点を挙げます。

○教師のみとりの弱さが子どもの課題意識を深化できないことにつながっていった。子どもたちが自分の学びであることを意識し，主体的に学ぼうとする姿をめざすためにも，より丁寧で的確なみとりがいるのではないか。

○教室に起こっている事実を丁寧にみて，一人一人がどう動き，何を求めているのか，子ども理解を深くすべきではないか。

○学級風土の在り方について，さらに職員全体で共有できるベースとなるものが必要ではないか。

これらをうけてさらに研究を進めていきたいと考えています。

【来年度に向けて】

上記に挙げている課題を踏まえ，来年度からも子どもたち一人一人が主体的に学ぼうとする取り組みを行っていきます。来年度の研究テーマは，「問い続け，学び続ける子どもたち」です。これまで積み上げてきた研究の成果を活かしつつ，新たな視点も交えて研究を進めていくことを考えております。2015 年度の研究発表会は，10 月 31 日（土）開催予定です。講師先生には，鹿毛雅治先生（慶應義塾大学教職課程センター）にご指導いただけることになりました。2015 年度からも本校の取り組みにご注目ください。

第８回ＩＣＴ活用授業研究会を終えて

本校では，ICT 活用授業研究会を始めてから今年で８年目を迎えました。本年度は「学びをデザインする子どもたち～子どもの反応が変わるＩＣＴ活用～」というテーマをもとに研究を進め，１月３０日（金）に本会を開催しました。５クラスの公開授業，協議会を行い，豊田充崇先生（和歌山大学）に講演していただきました。

本会の５授業の ICT 活用の提案として出されたものは下記のものでした。

1A 国語「どうぶつの赤ちゃん」：実物投影機・プロジェクタ

普段の授業から使用している機器を用いて，共同注視できる手立てとしたり，また学習意欲を高めたりすることをねらいとした。

3A 社会「安全なくらしを守る消ぼうの仕事」：iPod touch・iPad mini･実物投影機･プロジェクタ

今まで撮りためた写真を選び，全体発表の場で提示することで自分の考えをより友だちに分かり易く伝えるための手立てとして iPad mini を使用した。

34F 国語「かるた」「ウナギのなぞを追って」：タブレット PC・プロジェクタ

プレゼンのシート作りや話しあった結果をすぐに自分の作品に反映させることができたり，それぞれのシートを比較したり，作業時間を短くできたり，多くのメリットが考えられる授業となった。また複式学級として，自分たちで学習を進めるための支援の１つとなった。

6A 算数「拡大縮小の活用」：iPad アプリの“Geometry Pad for Kids”

アプリを使用する際，子どもたち同士の必然的なかかわり合いが見られることをねらいとした。またこのアプリを使用することで，寸分の誤差もない正しい図形が作図できる経験をさせるとともに，問題解決の助けとなるツールの１つとして用いた。

6B 体育「跳び箱運動」：iPad mini アプリ“Ubersense と SLOW Mirror”・Apple TV・プロジェクタ

Ubersense では，録画した２つの映像のタイミングを合わせ再生することができる。それは自分と友だち，以前の自分と今の自分を容易に比べられるので，具体的な話し合い活動を行うことができる。

多くの ICT 機器を活用しましたが，これからも ICT は広がりを見せ，それをどのように扱っていくかは教師の研究していくべきところだと考えます。しかし，何を用いるにしても子どもたち同士がかかわり合ったり，自分の考えをより分かり易く友だちに伝えたりするなど，学びを深めるための支援・手立てのツールの１つであるということに変わりはありません。

皆様からいただいたご意見をもとに，学びのためのツールの１つとして ICT 機器を扱い，よりよい環境を整え研究を続けてまいります。今後ともよろしくお願いいたします。　（ICT 研究部）



５授業の活用場面です。共同注視・かかわり合いなど，子どもたちへの有効な手立てと考えます。けれど，その扱いでの課題もみられた。



子どもたちが自ら，必然的にかかわり合いをもって学習に取り組む場面。



「ここと比べると」と具体的・視覚的に伝える場面。



「ぼくはここを選びました。どうしてかというと。」子どもたちが，共同注視している場面。



ＩＣＴを活用した跳び箱運動
～かかえ込み跳びにチャレンジ～

体　育
６年Ｂ組担任
則藤　一起



１．ＩＣＴを活用するにあたって

１学期のマット運動の学習時には，グループに１台タブレット端末（iPad mini）を与え，録画・再生機能を使い，客観的に観ることで互いにアドバイスをし合う学習に取り組んだ。雰囲気よく活動していたが，画面を通しての応援や撮ることだけになってしまい，運動のポイントとなる具体的なアドバイスができた児童は少なかった。そこで跳び箱運動では「踏み切り」「空中姿勢」「着手」「着地」のポイントに目を向けられるような声かけをしていき，タブレット端末で自分の動きを確認できるようにした。活用したアプリは①“スロー再生”や“動きを２つ並べて再生”できるもの，②“数秒遅れで自動再生”できるものの２つである。

２．ＩＣＴを活用した授業

①のアプリでは，録画した２つの映像をタイミングを合わせ再生することができるので“自分と友だち”“以前の自分と今の自分”などを容易に比べることができる。本時では，共通課題の中で子どもたちには一番難しい「かかえ込み跳び」に取り組んだ。①のアプリを活用し，跳べる友だちは“どんな風に跳び越しているのか”をみんなで考える時間をとった。『踏み切りの位置が遠い』『うさぎ跳びのように手が遠くについている』『手をすぐにつきはなしている』という意見がでた。今すぐ試したい！と子どもたちは意欲満々に後半の活動に取り組んでいった。



②のアプリは，跳んだ後すぐに自分の動きを見ることができ，とても便利に活用していた。またプロジェクターにつなぐことで拡大して見ることができ，友だちとアドバイスし合いながら取り組むことができた。





３．子どもの思いに寄り添って

初めのアンケートでは“確実にできる”“たぶんできる”と答えた児童がわずか５人であった。そこで場の設定は安心して“やってみよう”と思えることを第一に考えた。準備の運動では，かかえ込み跳びの基礎となる感じをつかませるために，うさぎ跳びに取り組んだ。このことにより手をすぐにつきはなし，足の裏から跳び乗ろうという動きにもつながった。少し高さがあるところでもできるように，段階に応じた場を設定した。映像で分かってはいるが自分の体の動かし方を難しそうにしている子には，踏み切る位置をテープでマークしたり，手のつきはなすタイミングをアドバイスしたりするなどして支援した。







４．何度もチャレンジし続ける子どもをめざして

初めはできないと思っていた子どもが多かったが，１時間の内に跳べる子，または惜しい子がたくさんでてきた。跳べた子は何度も跳んで自信をつけ，跳び箱を縦にして取り組んだ。すると，第一空間での距離が足りないために跳べず，また横の跳び箱に戻ってきれいに跳ぼうとチャレンジしていた。惜しい子たちはどうしたら足が抜けるのかを話し合い，何度もチャレンジしていた。単元の後半は，かかえ込み跳びをめあてにする子どもが多かった。それは跳べないから毎回のめあてになるのではなく，縦で取り組んだり高さに挑戦したりする甲斐があったからである。そして運動の様子を友だちに撮ってもらい，跳び越せたときには思い描いていた動きだと嬉しそうにしていた。

複式学級1年目
教師と子ども　いろいろ挑戦



国語科
３４年Ｆ組 担任
宮脇 隼

初めての複式学級

今年度，初めて複式学級の担任になりました。子どもたちが進めていく複式の授業スタイルに，頼もしさと戸惑いを感じながらのスタートになりました。まずは，子どもたちに授業を進めてもらい授業の様子や子どもたちの様子を観察しました。いいところは残しながら，もっとこうだったらいいのにと思うことは私なりにアレンジしながら進めていきました。

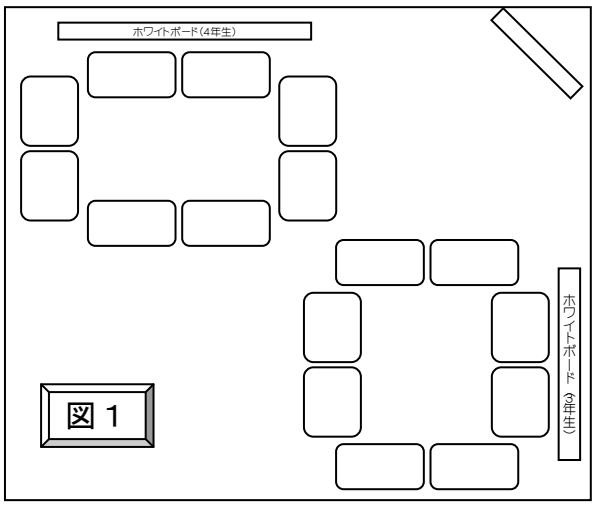
いくつかの取り組み

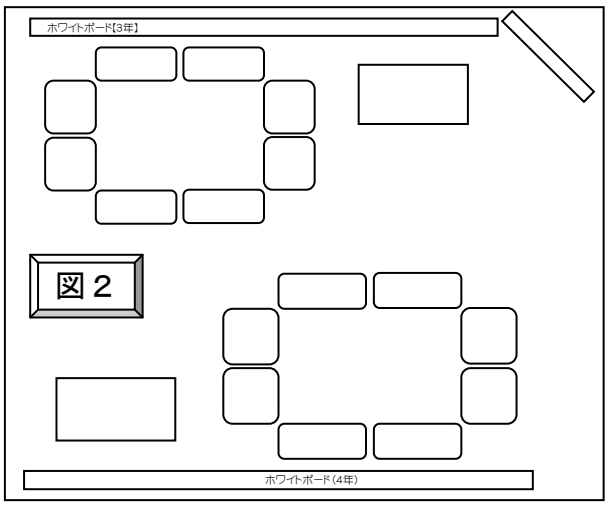
【司会・記録を教科で固定】

まず，最初に司会・記録を固定しました。子どもたちが主体的に学習を進めていくために大切なことは，授業の見通しをもつことだと考えたからです。「昨日はこんな学習をしたから今日はこれだなぁ。」「明日のために，今日はここまで進めたいなぁ。」ということを意識して日々の授業に取り組むことが子どもたちには必要だと考えました。そこで，主要４教科の司会・記録を固定しました。それまで，司会・記録を１日交替していた子どもたちにとって新しい挑戦になりましたが，子どもたちは前向きに取り組むことができたと思います。授業前に司会の子が本時の課題や進め方を聞きにくる姿が見られるようになりました。教科で固定したことで，見通しをもつこと以外に責任感も生まれたのだと思います。

【教室配置の工夫】

教室の配置も模索しながら進めていきました。４月当初の教室の配置は，図１のように対面しない形でした。その方が，３年生と４年生の学習がみとりやすく，同時間接の指導に合っているのです。しかし，私にとっては双方が近すぎて情報が多くなりすぎ処理しきれないときが多くありました。そこで，図２のように対面するような形にしました。そうすることで，子ども同士の距離も大きくなり話し合いの内容を聞きやすくなりました。また，子どもたちも片方の学習が後ろ側になることで，自分たちの学習に集中できるようになったと思います。





【4 人グループ】

本学級では普段は各学年８人ずつで学習を進めていますが，８人を二つに分けて４人グループで学習を進めることもありました。慣れているとはいえ，８人グループは人数も多く，偏った子たちの話し合いになることが多くありました。そこで，教科によっては４人で学習を進める場面を作りました。子どもたちの振り返りの感想にも，４人グループの方が自分の意見を発言できることや，わからないところを素直に言えることなど大きなメリットがありました。ただ，この場合教室内に４つのグループができ，教師がそれぞれのグループに関わることが難しくなりました。

今後も子どもたちの様子をみとりながら，学級あった学習スタイルを模索していきたいと思います。

教師自身が実験をする楽しみを ～ものの温まり方の授業より～

理　科
４年Ｂ組担任
久保　文人



○子どもは大好き・教師は嫌い？

理科の授業にみなさんはどんなイメージをもっているでしょうか？「実験を喜んでくれる」という魅力を感じるものの「準備が大変」という先生もいらっしゃるのではないでしょうか？科学技術振興機構と国立教育政策研究所が実施した，小学校で理科を教える教員を対象とする「平成20年度小学校理科教育実態調査」においては，「学級担任として理科を教える教員の約５割は，理科の指導に苦手意識を感じており，その中でも教職経験が10年未満の教員では，６割を超えている」という結果が出ました。子どもたちにとっては比較的に楽しみな教科である理科は，指導者が負担に感じている教科でもあるといえます。負担に感じている要因としては，「専門的な知識がない」「準備や片づけが大変」「設備備品や消耗品が十分に設置されていない」などが挙がります。しかし，子どもたちにとっては本当に魅力的な教科です。平成24年度に実施した全国学力・学習状況調査（概要）によると「理科が好き」と回答した子どもは８割を超えています。私の学級にも４月にアンケートを実施しました。理科が好きな子どもが８割おり，好きな理由としてその中の９割の子どもが「実験が楽しいから」と回答しています。

○実験の準備をする苦痛を楽しさに

私は，今年度の本校研究会で４年生「ものの温まり方」の学習をしました。その中の水の温まり方を調べる部分の実験方法は教科書では右の表になっています。

教科書会社	実験方法
啓林館	赤色の絵の具を入れる。 示温インクを入れる。
学校図書	コーヒーの出がらしを入れる。 示温インクを入れる。
教育出版	銀色の絵具を入れる。 茶葉を入れる。 示温インクを入れる。
大日本図書	けずりぶしを入れる。 示温インクを入れる。

私は今回，全ての教科書会社に記載されている実験を行いませんでした。まず，絵の具とコーヒーの出がらし，茶葉，けずりぶしでは水が上から温まることが確認できませんでした。本学級の子どもたちの中には，前時で水は上から温まる事実を見ても受け入れられていない子どももいたので，再度水が上から温まる様子を見せた方がよいと判断しました。また，示温インクでは水が上から温まる様子はわかるものの温まった部分が上へいき，上にあった部分が下へいく動きが見えません。そこで，用意したのは無色の液体洗剤とおがくずです。おがくずはコーヒーの出がらし，茶葉，けずりぶしと同じように水の動きが分かります。ここで，元々色がある示温インクを加えてしまうとおがくずにどのような変化があったのかが見えません。一方，液体洗剤は無色なのでおがくずの動きが見えます。さらに，液体洗剤の中にはポリオキシエチレンアルキルエーテルが含まれており，７０℃前後から白濁するので，おがくずの動きを観察した後に液体洗剤の変化を観察することができます。水を入れたビーカーにおがくずと液体洗剤を加えて熱することで，水の動きと水の温まり方を同時に観察できる実験です。

今回，実験がうまくいく液体洗剤を見つけるのに 10 数種類の液体洗剤を試しました。全く反応しない状態が続き，何度もあきらめかけました。しかし，最後の液体洗剤でようやくうまくいきました。実験方法をさがすことは大変でしたが，子どもたちのキラキラと目を輝かせながら実験に向かう姿を想像しながら取り組むと，とても楽しかったです。

実験の様子の子どもの写真がこちらです。（写真１）とてもいい表情をしています。実験の準備は大変ですが，こちらが努力すればするほど子どもたちがわくわくしてくれる教科が理科です。今では，子ども以上に楽しんでいます。



写真１　ものの温まり方の実験の様子

子どもとともに歩んだ１年
～算数科の学習を通して～

算数
１年Ｃ組担任
吉久　寛郎



◇ 算数が大好きな子を目指して

子どもとの初めての出会いは，入学式が始まる前の教室でした。とても緊張している子どもたちにどう声をかけたらいいのか戸惑ったことを思い出します。入学式で出会った子どもたちの瞳は，希望に胸膨らませキラキラとしていました。この輝きを失わせてはいけないと強く感じました。

□ 前向きな思いを大切に…

☆ 学び合いの場として，ペア学習に取り組んできましたが，私の方から設定したペア活動だけでなく，自然発生したペア活動を大切にしてきました。その子がその瞬間に切実に解決したいと思ったことが行動に表れているのではないかと考えたからです。子どもからそれが感じられたときには，どんどん関わりをもつように声をかけました。



（自然に相談する姿）

☆ 計算のきまりを見つけた子どもが，ノートにどんどん計算をし始めることがありました。引く数が９の計算を引かれる数が５００近くまで計算してきていました。きまりを見つけていたので機械的な作業だったため，途中でズレてきてしまい最終的には答えは間違ったまま終了していました。『ここから間違っているよ。』と正すこともできましたが，してきたことの素晴らしさを認めることにしました。まだまだ不完全なことの多い子どもたちの見せる頑張りをしっかりみとり，適切な声かけができるようにいつも意識しました。

□ ふり返る言葉を大切に～「前にもあったけど」～

日々の算数の授業の中で大切にしてきた言葉の一つとして「前にもあったけど…」があります。以前の学習と今の学習をつなぐ言葉であり，学習内容がスパイラルする算数科において非常に大切な言葉です。また，この言葉を大切にしていったことで，ノートの扱い方も大きな変化を示すようになりました。ただ書いて終わりだったノートが，学習を振り返るために過去に書いたノートを振り返る姿が見られるようになりました。子どものノートに対する意識が変わるきっかけとなったと感じています。

□「あれ？」「どうして？」を大切にした授業づくり

大人には当たり前に感じることも，１年生の子どもにとっては新鮮で新しい発見です。例えば，『いくつといくつ』の６の合成・分解の学習では，「階段が見つかった。」「反対がある。」「数字の順番になっている。」など，目を輝かせて発表してくれました。子どもたちは，きまりを見つけたり，いい意味で期待を裏切るような課題に出合ったりするとワクワクして学びます。「あれ？」「どうして？」といった疑問が，子どもの主体的な学びを助けると考えます。さらに，学び続ける中で「なぜ？」をいつももち，自ら学んでいく力が高まっていってくれればと思います。



（休み時間に必死で考える姿）

◇１年を振り返り

入学当初，「算数の勉強が楽しみ！」と答えてくれた子どもたちに，何が楽しみか聞いてみると，どの子も四則計算を楽しみにしていることが分かりました。子どもたちにとっての算数とは，計算という狭い領域がほとんどでした。

そのような子どもたちに，少しでも数学的な楽しさ，面白さに触れさせてあげらることができればと思い指導してきました。

素直な反応を見せてくれる子どもたちに，私自身も学ぶことがたくさんありました。本当に子どもとともに歩んだ１年でした。

今も子どもたちは，笑顔で「今日の算数は何するの？」と声をかけてくれます。より質の高い笑顔を目指し，今後も研究を深めていきたいと考えています。

「語り」による表現活動の取り組み
～2 人語りからクラス語りへ～

国語部
３年Ｃ組担任
北川　勝則



本クラスでは，総合的な学習の時間（CHANGE）に，「いろいろ表現３Ｃ劇場」と名付けて，複数人語りに挑戦しています。

「語り」とは，簡単に言うと相手意識を重視した暗唱です。音読では，速さや声量を工夫することにより，伝えたい内容を表現します。それに加えて，語りでは視線・表情・身振り手振りも表現技法に加わります。このように多様な表現が可能なので，たとえ同じテキストを使っても表現者により，個性の違いが現れてきます。そこに子どもたちの工夫する楽しさがあるようです。

そして，本クラスでは一人語りではなく，複数語りを行っています。そのねらいは，以下の通りです。

・ペアやグループで演じるためには，互いの意思疎通が不可欠になること

台本が決まっていても，タイミングや身振り，立ち位置など様々なことを相談しながら進めていく必要に迫られます。お話の内容についても，互いの思いを語り合って，協力してつくることができます。

・仲間がいると心強い

一人で演じるとうまくできるか不安になりますが，みんなでやると不安もペアやグループで分かち合うことができ，楽しく表現することができます。

・表現を分担できる

一人語りだと，一人で何役も演じ分ける必要が出てきます。しかし，複数人数で行うことで枠割り分担ができます。また，多様な表現を交流できます。

○「語り」による子どもたちの学び

最初に語りを行っている映像を児童に見せました。そして，「音読と違うところ」という視点から語りの特徴について考えさせました。





児童からは，
○動作があった。（身振り手振り）
○聞き手とアイコンタクトをしている。
○見る先を変えていた。（まるで見ているように）
といった気づきがありました。1 学期には「２人語り」の台本を使いペアで語りを発表しました。そして，２学期は４人語りをグループで行いました。そして，最後には全員でクラス語りをしようと取り組んでいるところです。語りを通して，楽しみながら子どもたちの表現力をつけていきたいと考えています。

いつもお読みくださりありがとうございます。 これからも皆様によりよい内容を提供できるよう努めてまいります。

平成２７年度教育研究発表会　１０月３１日（土）
研究テーマ「問い続け，学び続ける子どもたち」
講師　鹿毛　雅治先生（慶応義塾大学教職センター教授）

From Editors

『らいぶ・創りえいたー』も 14 年目を迎えました。「生き生きと本物を創り出すひと」という意味を込めています。本校ホームページにはカラー版を掲載しています。ご意見・ご感想をお寄せ下されば幸いです。

編集委員：矢出，中西，川村，居澤，宮脇，田中

和歌山大学教育学部附属小学校
〒640-8137　和歌山市吹上１丁目４番１号
TEL　（０７３）４２２－６１０５
FAX　（０７３）４３６－６４７０
URL　http://www.aes.wakayama-u.ac.jp
Ｅ－mail　fuzoku@center.wakayama-u.ac.jp